巡検報告

下　北　半　島　（式教官）

昭和40年8月23日～26日　4年

本州の最北端に位置する下北半島はその地理的位置や社会的要因により，日本の後進地域又は辺彊地域として，各方面から調査対象地域に選ばれ最近では〝オシラサン〟という祭祀集団に関してもマスコミでとり上げられている。

私達がこの地域の巡検を行なったのは昨年の8月23日 → 26日の4日間であった。4日間の調査期間では地域の辺彊的性格について明確には把握しえなかったが，各部落が時の流れと共に各各の方向に動きつつある事を知る事ができ，興味深いことであった。

下北半島には四国香川県と同じ位の広さをもつ東通村という独立機能をもった村落共同体が現在も残っている。その中には更に部落が29あり，その各々の部落があまり結合関係をもたず独自の機能をもち，地域性を形成している。

東通村全体から産業構成，人口比をみると，農業60％，漁業30％，林業10％という数字を示すが，漁業の示すこの数字はここ数年大きく変ったものとみられる。

私達が調査した冗屋，尻労，猿ケ森の部落ではかっては臨海村として同じ様な機能を持っていた。然し，にしん漁場の衰退，駒ケ岳噴火によりコンブがとれなくなった事，又防衛庁が試射場を建設した為に漁場が破壊された事等の原因により，明らかに違った方向へと移行しつつある。

尻労では男子の過剰労働力を出稼ぎという消極的態度で解消し，女，子供が自給程度の農業を行なっている。猿ケ森では猿ケ森納屋が破壊された為，純農の方向へ向かいつつある。但し，尻屋のみは，漁業を上述した点は克服，次男，三男という家族労働力の供給をうけ，更に高度の方向へと進みつつある。漁業の比が6：4であったのが8：2という比率に変り，漁村としての機能を強化している。

以上の様に三部落のみでは説明も不充分ではあるが，時の流れと共に，今迄の地域性を更に強化している部落，違った方向へと移りつつある部落（この場合建設的に）又逆に現在の機能を崩壊しつつある部落と，独自の方向を決定しつつある。この様な事は決して下北半島のみでみられる事実ではないかもしれない。　（4学年　畑　野）

奈　良　盆　地　（渡辺教官）

昭和40年10月